

ロンドンで初の海外受検 = 全国で4万7000人超が挑戦 第4回検定を実施

正しい日本語を身に付けてもらうことを狙いとする「日本語検定」（略称・語検）の平成20年度の第2回（通算第4回）検定が、11月7、9、15日、全国116都市、129会場などで行われました。受検者数は、回を重ねるごとに増加し、今回は4万7306人が受検しました。2年目となった語検の今年の実験者数は6月の分と合わせてこれで9万5000人と10万人に迫る勢いで、前年の2倍以上となりました。

また、英国・ロンドンでは、海外の国立大学と提携し、これらを拠点に日本語教師養成などを行っている日本語教育機関の「アルファ国際学院」（本社・東京）の後援を得て、初めての海外受検が行われました。

「語検」は、敬語や文法、語彙（ごい）、表記など6領域について、正しく使う能力を測るものです。1級から6級まであり、小学生から社会人まで幅広い年齢層を対象としています。検定結果は、12月上～中旬にかけてホームページで合否速報が行われ、その後受検生個人に合否通知が発送されます。

受検申込者数は、1級（社会人上級）653人、2級（社会人中級・大学卒業程度）4877人、3級（社会人初級・高校卒業程度）1万1844人、4級（中学校卒業程度）1万3557人、5級（小学校卒業程度）1万71人、6級（小学校4～5年程度）6304人。最年長者は89歳、最年少者は6歳でした。



「難しかった」と英国人受検者 = ロンドン会場

初の海外受検となったロンドンでは、一般会場と準会場受検が行われました。一般会場では、15日に国立ロンドン大学バークベック・カレッジで現地の日本人や英国人ら計21人が受検し、準会場受検は帝京ロンドン学園が会場となりました。

1823年に創立され、1920年に王立ロンドン大学に統合された歴史を持つバークベック・カレッジ。曇り空の週末の構内は人影もまばらでしたが、検定が行われた教室は、首を傾げたり、頭を抱えたりしながらも問題に真剣に取り組む受検者の熱気に包まれました。

日本人の夫を持つロンドン在住のカナダ人女性（39）は「夫や日本の家族と日本語でコミュニケーションを取れるようになりたい」と6級に挑戦。受検後は「楽しかったけど、時間が足りませんでした」と苦笑いでいました。

ダンサーとして日本で働いた経験がある英国人女性（38）は「文字や文法が全く異なる日本語は、ドイツ語やフランス語と比べてずっと難しい」「事前に勉強は頑張ったけど（6級は）レベルが高かったです。合格する自信は全くありません」と語りました。

日本語教師を目指す40代の日本人男性は2級にトライし、「時事問題なども踏まえ、しっかりした問題でした」と感想を述べました。また、最近の日本語の乱れに関し、「その場限りの流行り言葉などは使わないようにしています。ただし、時間とともに定着した表現などは積極的に取り入れたいと思います」と話しました。

ロンドンでは今回、2級合格者が対象となる1級は実施されませんでした。2級受検者の多くが「チャンスがあれば1級にも挑戦したい」と意気込んでいました。

次回はフィリピン大学でも実施予定

アルファ国際学院の梶浦琢磨学院長は「語検は、日本語教師を目指す人にとっては、日本語能力を検証するのにふさわしく、また上級レベルの外国人日本語学習者にとっては、これまでの日本語能力試験と違い、外国人だけでなく日本人も受検する試験なので、一般の日本人に対し外国人の日本語能力を示すに適していると考え、日系企業などへの就職を考えた場合に有利になる試験と考えました」と話しています。

次回からは、フィリピン大学やタイでも実施する予定です。